

「李白飯顛山頭逢杜甫」逸話考

—— 禪林における杜甫像寸見 ——

朝 倉 尚

文筆の業を尊重した本朝禪林・禪僧に及ぼした李白・杜甫の影響は大である。李白に対しては、その自由で奔放な行動・作品を基盤とした諸逸話を通じ、李白像を作りあげていた（拙稿・岡山大学教・「禪林における李白」）。禪僧は、李白の人間・作品の特質の一を「天上の人」・「仙」に求めている。この点、杜甫は対照的である。その特質は「地上の人」・「情」にあると考える。杜甫の逸話の底に漂っているのは悲哀であり、悲惨であることが多い。

〔I〕 典 拠

杜甫に関する逸話の「李白飯顛山頭逢杜甫」逸話（以下「飯顛」と略）が知られている。典拠としては、本事詩（唐・孟）・高逸第三とされる。

白才逸氣高、與陳拾遺齊名、（孟）、故陳李二集、律詩殊少、嘗言與寄深微、五言不如四言、七言又其靡也、況使東於聲調俳優哉、故戲杜甫、

飯顛山頭逢杜甫 頭戴笠子日卓午 借問何（別）來太瘦生
總爲從前作詩苦

蓋譏其拘束也、（續歷代詩話所収。諸橋轍次著・大漢和辭典）

逸話の目的は、李白の「高逸」の言行を示すことにあった。詩題に

相当する「戲杜」、孟榮の評に相当する「譏其拘束也」に注目される。李白は、作品ばかりでなく万事にわたり拘束・束縛された杜甫の窮屈な有様に対し、戯れに詩作によって譏ったものである（孟榮の説くように、李白が散句をもってする古体の詩において声調・俳優にとられることなく秀作をものしたのに対し、杜甫は近体詩・定型詩のうちとくに対句を）。

重視する律詩に秀れた）飯顛山頭逸話（詩）は、作者・李白の高逸よりも詠出された杜甫の「瘦」を示す逸話（詩）としての性格を濃くしながら、唐撫言・西陽雜俎・唐書・漁隱叢話・詩林廣記・唐詩紀事・鶴林玉露・六一詩話等、主として詩話類に収められながら、流布した。李白の作品集に載っていないこの逸話詩については、作者は李白ではなく、晩唐のころ李白の名に託して生まれた偽作であると理解されるにいたった。

飯顛山頭逸話は、偽作とはいいながら、李杜の性格・交友を考える上で有益・参考となる。それだけに、現在でも種々の問題点・疑問点が提起されている。例えば、郭沫若氏（須田嶺一訳「李白と杜甫」）や黒川洋一氏（「杜甫」）、「杜甫」の詩歌上の交際（参照）や黒川洋一氏（「杜甫」）、「杜甫」の御論考がある。特に、郭沫若氏はこの逸話詩について、真心のこもった李白の真作であるとして論を進められる。詩題相当部の「戲」

字は後に誤つて加えられたものであると考へた上で、転・結句を李白と杜甫の間答であると解される（前掲書において、「詳しく述べたくないか」と李白が問うたのに対して「昔からずいぶん瘦せたに苦しんだせいさ」と杜甫が答えたのである。このような詩のこも積まれてしまつたのである。」とされる）。李杜の作品集を通じて確認される親密な交友を考へる時に、捨てがたい解であるが、従來の説を訂正するほどの説得力には欠ける（例へば、黒川氏の前掲書はよろしくない。」として、「この詩はやはり晩唐のところに李白の名に託して生まれた偽作と考へるべきであり、晩唐のところに李白をやほつた詩を作る詩人として評価していた晩唐の。」）。逸話（詩）の理解を助け、問題点をまとめる意味で、詩に対する私の訓説と訳を試みておく（本事詩以来の旧説を参考にしては、六一詩話入宋、歐陽修撰Vに「太瘦生唐人語也、至今猶以生爲語助、如作麼生・何似生之類是也」と、語助・助辭であると指摘する。）。

原文	戲 社 飯顛山頭逢杜甫 頭戴笠子日卓午 借問別來太瘦生 總爲從前作詩苦	私 訓	社に戯る 飯顛山頭杜甫に逢ふ 頭に笠子を戴き日卓午たり 借問す別來太だ瘦生 總べて從前作詩が苦のためならん	私 訳	戯れに杜甫を譏る歌 飯顛山のほとり、杜甫君に逢つた 日盛りの中、日笠のいでたち ぶしつけながら、あれからずいぶん瘦せたじゃないか すべて、昔ながらの詩作りの苦辛のせいにちがいない
----	---	-----	---	-----	---

(II) 抄物における理解と逸話の流布

飯顛山頭逸話の禅林における流布は、当代の文芸風潮の一である「李杜詩尊重」の現れでもある。禅僧は逸話をいかに理解して自己の観念裡に定着させていたのであるうか。その一端を「抄物」に窺う。

抄物に示される飯顛山頭逸話に対する禅僧の理解は、二面より検討される必要がある。一は飯顛山頭逸話そのものに対する講述・解説を通じての検討、一は逸話を引用・詠出した中華の詩作に対する講述・解説を通じての検討である。

〔逸話理解を目的とした抄物〕は禅僧の理解の実態

逸話そのものに対する理解については、次のような抄物に示されている。

蕉窓夜話

抄者は断定しかねるが、逸話詩を掲げた上で解説する。詩としては、次の

本文を採用している（「蕉窓夜話」の本文としては續群書類従所収本を用いた。以下同。）（ては、句説点・字体については筆者が適宜統一した。返り点や細字の送りつがな・書き入れ・符号等については、原則として省略した。以下同。）

飯頼山頭逢杜甫 頭戴笠子日卓午 杜甫依何太瘦生 定是從前作
詩苦 (蕉窓夜話)

本事詩等と較べるとき、転・結句に異同が存す。夜話本文では、李白の自問自答があるいは杜甫に対する呼び掛けとして解される。

此詩ハ李白カ杜甫ヲ嘲テ作タソ、是ホト山ハ飯ヲモリタテタルヤウナニ何トテヒタルサウニ杜甫ハ瘦タソ、作詩苦カト也、東坡カ批語飯頼トヤラ云事ノアルハ心得ニクイ事ナレトモ飯ヲモリタテ、キヲトシタル心也、 (蕉窓夜話)

抄者の解の要点は次のようになる。一は、詩が嘲詩であるとする点である。本朝禅僧は「譏」↓「嘲」と解している。二は、「瘦」の因が「作詩苦」にあつたとする点である。孟棻は「譏其拘束」と評したが、夜話では詩の内容に即して「嘲瘦・嘲作詩苦」として解している。三は、飯頼山を詠出した意図が、杜甫の瘦姿と飯頼(粒めし)という山名・山姿を対照させて逸話性を添えようとしたことにあるとする点である。

玉塵抄 惟高妙安 (一六七五) の抄した玉塵抄からは、二箇所の説明を引用する。一は、飯頼山頭逢杜甫 句に對しての説明である。

李白カ詩ナリ、飯一山ハ蜀ニアリ、杜カイタアタリニアリ、山ヲ飯ヲモツタ山ト云ガ杜ハソコニイテナセニウエテヤセタソト云タソ (玉塵抄・「飯頼逢」項)

杜甫在蜀中の逸話と解している。詩の面白さ・眼目が、杜甫の飢・瘦と飯頼(山)を対照させている点にあるとする。

玉塵抄の二は、「飯頼山頭逢杜甫」一、爲問縁何太瘦生、

に対する説明である。

此ハ李白カ杜甫アサケル詩ナリ、大ナ馬ノカシラノヤウナ飯ヲモツタト云山ノソハニイヤセヒコクメイツ飯クウタヤウニモツラナリ、ナニコニサウヤセタソ、誰シタニタ、平生ヲ詩ヲ案メ辛苦スルイワレニヤセタソト作タソ、長安ニアル山ナリ、長安ハ蜀ノミヤコナリ、唐ハ長安ヲミヤコニセラレタソ、方輿(輿)ニアラウソ、飯頼ノ心モアラウカ、 (玉塵抄・「飯頼山」項)

不分明な部分も存すが、嘲詩であること、瘦と飯頼を対照させていること、瘦は作詩苦によること等は蕉窓夜話の解と一致する。杜甫の長安・京師滞在中の逸話とするが、李白との交遊や仕官を求めて樞門を歴訪する瘦姿を想起したものである。(蕉窓夜話・玉塵抄とも「瘦」と「飯頼」の対照の妙を指摘する。諸橋徹次著・大漢和辭典では、飯頼山項に「物に拘泥すること飯粒の粘着するやうであるを」とあるが、本朝禅僧は飯粒の粘着性には注目していない。)

中華若木詩抄 如月寿印の抄したとされる中華若木詩抄には、

北宋・黄君度・「乞米」詩の解が載せられるが、起・承句「恨不移封飯頼山、却來寫帖學陶顔」に関連して、次のように説いている。

貧ナルホトニ米ヲ人ニ乞タ詩ソ、飯頼山ト云ハ山ノ名ナレドモ飯ト云ハンズルト云ヘル儀ソ、飯ト云ヘハ無風流ナルホトニ山ノ名ニヨソヘテ云ソ、李白カ詩に飯頼山頭逢杜甫ト作タ、コレモ杜甫ニ美ガ寒餓ナルヲアザケリテ作タソ、ソレヨリ杜甫美ト李白トウス中ニナルソ (中華若木詩抄)

飯頼山頭逸話については、寒餓を嘲った嘲詩であるとする。寒餓

・貧困による瘦とする解は、*「作詩苦」*によるそれと説く解に較べ、現実的・通俗的である。さらには、*「ソレヨリウス中ニナルソ」*と、李杜が仲違いした・不仲になったとする点に注目される。「嘲詩」であるとの理解より、このような解釈が生じるのは当然のように考へるが、李杜の親交について否定的に論及する本朝禅僧は稀である。

本朝禅僧の飯頼山頭逸話（詩）に対する理解は、それを目的とした抄物で見ると限りでは、「嘲詩」であること、瘦の因が「作詩苦」にあること、「飯頼と瘦の対照の妙」が意図されていること等に存するようである。

〔中華詩作理解を目的とした抄物〕

飯頼山頭逸話を引用・詠出した中華詩人の詩作に対する講述・解説がある。蘇軾詩の二三をとりあげて検討する。

四河入海

蘇軾が飯頼山頭逸話を引用・詠出した作品として、まず次詩を掲げる。

次韻沈長官

家山何在兩忘歸 杯酒相逢慎勿違 不獨飯山嘲我瘦 也應糠粃怪君肥

君肥

（蘇東坡詩集・三首中第一首）

沈長官に应酬しての詩作、熙寧七年（蘇軾、三十九歳）杭州通判として蘇州にあって製したものである。共に異郷に在る身、相会の折は宜しく飲酒して情を慰めようと呼びかけた後、軾句に自己を杜甫に比して逸話を詠出する。軾・結句について、四河入海所収の「韓翁聞書（別名「蕉雨余滴」。桃源）は次のように説いている。

不^一、李カ杜ヲ嘲タ故事ヲ借テ云ソ、坡言ハ我カ瘦タヲ嘲ル、ハ道理ソ、我ハ客裏テ食物モ乏程ニ實ニ可瘦カ理ソ、サテ貴方カ糠粃ノヌカカスハカリ食テ居カナントシタレハホテト肥テワタルソ、不審ナルコトソ、我カ瘦タハ勿論ソ、コレハヨク心安キ友テナラテハ云ハヌ事ソ、隔心スル人ニ如此云タラハ可怒ソ

（四河入海・一韓翁聞書）

右の解では、次のような点に注目する。一は、逸話（詩）が杜甫を譏り嘲ったものとして理解されている点である。蘇軾詩は「嘲」字を用い、聞書は「李カ杜ヲ嘲タ故事ヲ借テ云ソ」と記している。二は、蘇軾を譏り嘲った内容・理由を、作詩苦ではなく、辺境における貧困の瘦姿として転借用している点である。三は、蘇軾が「嘲我瘦」としながらも「怪君肥」として遠慮なく沈長官の肥満を揶揄した事につき、「コレハヨク心安キ友ナラテハ」としている点である。飯頼山頭逸話を作り上げた原作者の意図を理解し、反映した解説であると考へる。逸話原作者のそもその意図は、李杜の親交を認めた上で、両者の間が逸話に示される詩の真意が通じ合う程の隔てない間柄であったことを示すことに存したと考へるのである。蘇軾詩とい聞書とい、原作者の意図を察知している。

蘇軾には、元豊五年（蘇軾、四十七歳）の黃州流謫中、清明節にあたり黃州太守の徐使君より新火を分けて送られたのに対し、「徐使君分新火」詩で応えている。四句を抄出する。

黃州使君憐久病 分我五更紅一朶 從來破釜羅江魚 只有清詩嘲飯顆

（蘇東坡詩集・「徐使君分新火」詩・抄出）

徐使君が我が枯槁にして久しく病むを憐み、新火を分かち送られた

ことに對し、後漢の范冉の「釜中生魚」逸話（貧のためにしばしばを生じた逸話）と飯顛山頭逸話を引用し、自己の貧の実態を述べ後漢書・独行伝）と飯顛山頭逸話を引用し、自己の貧の実態を述べている。「只有」句に對して、四河入海・一韓翁聞書では次のように説いている。

只有、坡言ハ我カ計會メ食物カナサニ瘦ヲ諸方ノ人カ嘲テ詩ナントニ作ラル、事ハ子美カ李白ニ嘲ラレテ詩ニツクラル、カ如キノ、諸説多ケレトモ此説カヨイン、

（四河入海・一韓翁聞書）

聞書が「諸説多ケレトモ」としていることについては、「只有」項に示される次のような引用が参考になる。

脛云、或云、言凡所以得瘦以其不食也、故以飯山嘲杜甫瘦也、言我今貧困可謂飯生塵釜生魚也、然徐使君塗火、豈非與飯顛之嘲相類耶、刻謂、不必以分新火比飯顛嘲、只言常時貧困爲人所嘲乎、

（四河入海・脛説）

脛説の引く某人説によると、徐使君が新火を送るのは蘇軾の貧を嘲つたもので、飯顛山頭逸話の嘲に類似するとする。瑞溪周鳳は、ただ當時蘇軾の貧が世人の嘲るところであつたことを述べたものとす（「脛」とは、瑞溪周鳳の註釈書「脛説」よりの引用であることを示す。或については定かでない。刻については「刻楮子」の略で、瑞溪）。聞書の解は、瑞溪説を承けたものである。自身のことである。

蘇軾詩・各抄記事で注意すべきをまとめると次のようになるうか。一は、飯顛山頭逸話が貧困を嘲つたものとして解していることである。

二は、蘇軾が逸話詩を「清詩」と考えていたらしいことである。蘇

軾は、逸話の真意が李杜の隔てのない親交を示すことにあると理解していたからではあるまいか。四河入海・「清詩」項には、万里集九の註釈書「天下白」より次のように引用している。

白云、李白以清詩嘲杜之瘦、徐使君分新火嘲先生之貧、其趣同也、

（四河入海・天下白）

万里も李白詩・逸話詩が清詩であることを説く。清詩の「清」たる所以については触れていない（万里は、前述脛説）。

蘇軾はさらに、元祐元年（蘇軾、五十一歳）に錢穆父の詩に次韻して応えた「次韻錢穆父」詩を製し、故人飛上金鸞殿、遷客來從飯顛山」としている。錢穆父を李白に比し、蘇軾を杜甫に比した表現である。

一韓翁聞書によると、兩句について次のように説いている。故人一、一、サル程ニ此句ノ金鸞ト云ハ翰林ノ事テアル程ニ李白ヲ云ヘキノ、サル程ニ翰林學士ノ事ニハ見イテ李白ニ見テ李白ヲ以テ穆父ニ比ソ、坡言ハ貴方ハ如李白ナル人ソ、サテ遷一、飯顛山ハ杜甫カ故事ナレハ坡自比杜甫メ云ソ、我ハ遷客身テスキシ方アツタ程ニ瘦瘦テ老杜カナリノ如ナソト云心ソ、

（四河入海・一韓翁聞書）

《遷客》・左遷流謫の蘇軾の瘦姿を、飯顛山頭逸話の杜甫のそれに比す。

抄物に講述・解説されている飯顛山頭逸話について検討した。逸話理解を目的とした抄物と中華詩作理解を目的とした抄物では、講述・解説された内容に、共通する部分もあるし、異なる部分もある。逸話詩が杜甫の瘦姿に對する「嘲詩」であるとするとする点では、兩者とも共通する。瘦の原因については、逸話理解を目的とした抄物

が主として「作詩苦」によると解したのに対し、中華詩作理解を目的とした抄物(限定される)では貧困によるものと解していた。

この点は、作者・蘇軾の逸話理解が現実的・通俗的であるということではなく、杜甫を自己に比して謙遜して表現したためである。蘇軾の場合、逸話詩を「清詩」とし、李杜の隔てのない親交を認める立場に立っていると解される。中華若木詩抄のように李杜不仲説の方がより逸話的とも考えられるが、他の抄者は両者の具体的交友については触れていない。両者の親交を既定・白明の事として認めたと上の沈黙と解される。「瘦と飯顛の対照の妙」については、中華詩作理解を目的とした抄物では触れていない。逸話(詩)の真偽の問題については、後世の偽作であることに気付いているようである(例えは「次韻錢穆父」詩・「選客來從飯顛山」句について、四(河入海の「飯顛」項では天下白の所説を引くが、その中で「胡茗溪云、李翰林集中無此詩、疑後人所作、或云、李白以杜甫顛、巖、故有飯山之嘲」と胡仔の撰した漁隱叢話の記事を載せる)敢えて論及しようとはしない。

(Ⅲ) 禪僧作品における理解と逸話の作品化

飯顛山頭逸話が禪林に普及し、禪僧の觀念裡に定着するにつれて、その作品に引用・詠出されるようになる。

夢岩祖心(一七四)に、次の作品がある。

大方名刹、旁搜儒典、工於篇章者若干人、各製唐律一篇、寫詭離之情、以爲言贈也、哀成一軸、屬余爲序、余展之風簾之下、細讀數遍、竊以爲嘲風弄月、黼黻大虛、劇內鉢心、作無益害有益、是以古之高僧焚筆研之不暇也、尙何霸橋驢上思而飯顛山頭之瘦

(瘦)耶、指天日誓後期、泫然出涕、黯然銷魂、閱卷兒女事、壯夫不爲也、(早寐集・「逕通知侍者歸鄉詩軸序」文・抄出)

東福寺通知侍者の長門への帰郷に際し、諸僧は各自一篇の送別詩を贈り、詩軸を作成する。序文を依頼された夢岩は、引用部では僧の贈詩の無益を説く。徒に花鳥風月を弄して詩文を製することは古尊宿・高僧のなす業ではないとし、瀟橋驢上の逸話(詩興を起すには、適當な環境が必)・飯顛山頭の逸話も尚質に値しないとする。

瀟橋驢上逸話は、鄭榮が「詩思在瀟橋風雪中驢子上」(全唐詩話)と答えたことより起る。夢岩序文の「瀟橋驢上思」(瀟橋は、瀟橋のことと)は詩思であり、「飯顛山頭之瘦」は詩瘦である。夢岩は飯顛山頭逸話を詩作に苦辛しての「作詩苦」の瘦であると解している。(なお、以下の引用省略略部において夢岩は、僧にして詩をなし詩を)もつて僧に贈ることは、古人の意に非ずして実は古人の意に適っていること)を述べる

中岩円月(一七五)は、丹波法常寺所藏本「東海一瀉集」に、次の四六文を遺す。

共君半宵話勝讀十年書、甘美有餘殘骨臉、示我數篇文過賜一雙璽、綺麗可觀對白抽黃、不解藏善故說項斯、奚以苦吟爲問杜甫、

(東海一瀉集・「江湖勸請實翁住淨妙疏」抄出)

実翁驗秀が淨妙寺に住するにあたっての江湖疏である。実翁の人物・詩文の秀れたことを、項斯・杜甫の逸話を引用して賛す。「説項斯」逸話は、唐の楊敬之が項斯の人物であることを世人に向って説

いた故事である（唐詩紀事によると、斯字子選、江東人、始末爲聞人、因以卷謁楊敬之、楊苦愛之、附詩云、幾度見詩詩盡好、及觀標格過於詩、平生不解藏人善、到處逢人說項斯、未幾詩達長安、明年擢上第」とある。中岩の疏に「不解藏善」とあるのも、楊敬之の詩句）。飯顛山頭逸話を引用するのは、実翁の詩才・文才をもってすれば、李白が杜甫にしたように瘦を問うほどのこともないとするためである。中岩の機転といささかの戯れの語氣を感ずる。中岩は、杜甫の瘦を「作詩苦」のためと解している。

義堂周信（一八三）の空華集からは、二詩を紹介する。一は、無外川方の病中の即興詩に和韻して応えた七言絶句詩である。走筆和韻方無外病中口占

詩癖憐君到骨深 幾回踏月步松陰 昔人解笑飯山瘦 今日何心更苦吟
（空華集・十首の中）

古寺閑房に病を養う身でありながら詩作する無外を杜甫に比し、昔人は杜甫飯顛山の瘦を笑事として解したが、今日君は何のつもりで苦吟を重ねるのかとする。義堂は、逸話詩が「嘲詩」であり、瘦の因が「作詩苦」にあるという理解を反映させている。さらに義堂詩は、親交のあった無外に対して、戯れに譏ったものであろう。義堂は、逸話の真意が隔てのない親交を示すことにあると解していたのではないかと想像される。義堂詩の二は、少陵・杜甫に対する次の贊詩である。

少陵

風塵漠漠鬢絲絲 許國丹心只自知 巴苻未醫驢子瘦 更添詩瘦最難醫
（空華集）

兵塵に捲き込まれて流浪を続ける杜甫であるが、身を捨てて国に尽

す忠心は自ら知られるところである。いま、ようやくに巴蜀の地にあって一時の平安を得たが、驢子の瘦もさることながら、杜甫の詩苦による瘦はもっとも重症で戻し難いものであるとする。「詩瘦」は、飯顛山頭逸話（詩）によった表現と考える（なお、空華集では「瀟僊」詩を置く。「瀟僊」詩は、李白の流瀟流浪を詠じたもので、結句を「塞驢破帽被誰何」とする。兩詩は同時の作で、騎驢像に対する贊である）。

応永年間（一三九四～一四二八）、関東を中心に活躍した僧に一雲聖瑞がある。次詩が認められる。

贊公土室
林抄（抄）殘陽磬一聲 黃塵鼓角隔瑤京 知詩村遠騎驢至 破笠吟詩大（太）瘦生
大雲寺の僧贊公の瀟居である秦州土室（穴居）について詠む。林の梢に夕陽が照り寺の磬声が聞こえ、戦の黄塵・鼓角が秦州と美しい京師とを隔てている。贊公の笠上云々の詩作を知り遠村より驢に乗りこに至ったのは、破笠を被って詩を吟じ大いに瘦せ細った杜甫その人であるとする。詩題「贊公土室」は、杜甫「西枝村尋置草堂地夜宿贊公土室二首」詩によったものである。転句の「知詩」については、杜甫詩の第一首「昨枉轍上作、盛論巖中趣」句に依つていよう。結句は、杜甫のことを詠出したことは明らかで、飯顛山頭逸話を念頭にした表現と考える（「大」↓「太」に）。一雲は、瘦の因を「作詩苦」によると解する。

瑞深周鳳（一七三四）には、次のような四六文がある（すでにそのしたが、

〔ハ〕内は私に訂正・補入したものである。

望其容則身不勝衣、荷此道而力能扛鼎、飯顛山前、逢〔瘦〕杜甫
口〔蓬〕髮添秋、翰墨場中、老伏波文鋒淬水、

〔瑞深疏〕「心田播首座住勢州正興同門并叙」・抄出

心田清播（一四七）が応永二十九年四十八才にして伊勢正興寺に住持するに際しての同門疏である。心田の容貌の形容に、飯顛山頭逸話を引用する。瘦身・白髮が想像される。『伏波』は伏波將軍のことで、「馬援據鞍」逸話等が想起される（伏波將軍は、漢の武帝の時、伏波將軍であった馬援が、老年になっても鞍によつて猶元氣のあることを示した逸話である。後漢書・列伝参照）。杜者を凌ぐ活躍を祈つたものである。

飯顛山頭逸話が普及すると、画図の図柄として用いられることも起こる。ここに希世靈彦（一四八）の作品が誕生することになる。

藤元康扇畫杜甫飯顛圖詩序

藤左金吾元康、嘗使工於扇上畫李白飯顛山頭逢杜甫詩圖、二子風流態度、宛然在目、固雖見畫、而如見詩矣、蓋言、山號飯顛、寧其可食乎、日既早午、其飢可知矣、實欲言飢而瘦耳、且伴問爲作詩苦耶、皆是白所以嘲甫也、元康亦寫吾真、而居其中、挾矢于腰、橫弓于膝、意氣揚々、其勢絕倫也、自謂、吾輩武人、一生暖飽、唯弓馬是習、以優以遊、樂則樂矣、顧視杜甫太瘦生、未知可否、輒作詩題其上、頗似爲杜甫解嘲者矣、元康既逝二十九年、而予觀此詩與畫、次韵題之、

實不救飢名飯山 唯言詩瘦更詩斑 知千古解嘲意 肥馬輕裘似

汗顔

〔村庵藁〕

藤原元康の所持していた扇面詩画に対して、序・詩を製し贊として添えたものである。飯顛山頭逸話（詩）と扇面画図と元康の贊詩とを勘案しながら、所説を展開している。画を見ること詩を見るがごとくであり、扇面画図には李杜二子の風流な振舞がさながら眼前に再現されている。『飯顛』とし『阜早』とするは、まさしく杜甫の飢餓・瘦を言わんがためであり、加えて故意に詩苦のためかと偽り問いかけたのであるうか。これらすべて李白が杜甫を嘲っているのであるとする。逸話詩があたかも李白の杜甫に対する意地悪・悪意の現われのように強調されているのは、そのような解が存したのも事実であろうが、元康が解嘲の贊を載せていたことに對する配慮である。『自謂』については、希世が元康の言を写したもので、元康の贊詩を要約したのであるうか。自分は武人として一生を暖衣飽食して過ごし、ただ弓馬の術を習い、優遊事に携わり、思いのままに楽しんだ。今、自分とは対照的な杜甫の瘦を目前にして、その可否は定かには知り難いが、自分なりに作詩して題したところ、思わず解嘲の意を述ぶることになったとする。希世の贊詩『實不』については、元康の贊詩を承けたものである。実は飢を救わないのに飯山と名付けたのは、ただ詩瘦・詩斑を言わんがためである。（公）
（康）の遠く後世まで残さるべき贊詩・杜甫への嘲りを解いた詩の真意が、肥馬輕裘の富貴こそかえって恥じ入るべきであることを示すことに存した点を覺つたとする。『詩斑』については、玉塵抄・『詩斑』項に唐詩・『髮爲作詩斑』句を引き、『髮ノ白ウナリ黃ニナツテマタジナノハ詩ヲ辛苦メ吟シ案スルニ氣カウキテ年カヨツテ斑ニナル

「ソ」^ソと説いている。

扇面画の構成については、逸話を素材とした画中に、元康自身の真影をも写している点に特色がある。小部分を割いて独立して描かれたものか、李杜とともに逸話世界に登場して描かれたものか、不明である。さらに、村庵藁の作品配列に注目する時、本作品・藤元康扇畫杜甫飯顛詩序の次には「元康扇畫劉伶酒壺圖詩序」が位置している。同じく旧元康所持の扇面画図・詩に對したものである。序文中、図柄に關して次のような説明がある。

按茲圖、在一扇中分其背面而兩幅、於其面畫杜甫、於其背畫劉伶、併見則可也、然其所爲、雖如滑稽、其旨遠矣、豈亦謗見者、所能及哉、
〔村庵藁・「元康扇畫劉伶酒壺圖詩序」・抄出〕

扇面の背面を分ち兩幅となし、表には杜甫飯顛圖、裏には劉伶酒壺圖が描かれている。希世の作品は同時の作ということになる。

然其所爲、雖如滑稽、其旨遠矣^ソには、道釈画としての鑑賞態度が示されている。劉伶^ソは、竹林の七賢の一人として知られる

（晋、沛国の人。字は伯倫、酒を好み、とくに阮籍）
・嵇康と親交す。劉伶解醒の標題で要求にも入る）

藤元元康については、希世の二作品より次の諸点が明らかになる。又の名を承貞、号を松岩、初め麗庵居士と稱した。元康既逝

二十九年^{（既）}とあり、元康扇畫劉伶酒壺圖詩序の末尾に「文明

乙未六月立秋、書于城北岩栖之村庵」と署名されていることより、

文安四年（一四四七）文明乙未は、文明七^{（年）}の死去となる。文化面

での活動では、詩を製し、和歌を善くした。新統古今集に一首入集する（巻十五・恋歌五・一五三六・同じ心を題・契らずよ）

希世・元康の飯顛山頭逸話（詩）に對する理解では、「嘲詩」であるとし、瘦の因が「作詩苦」にあるとする。「瘦と飯顛・卓牛の對照の妙」についても指摘する。悪意・不仲説にも触れながら、解嘲詩として製している。

横川景三（一四四）には、次のような作品が認められる。一は、「記」作品である。

瘦工部戴笠飯顛、日已卓午、書連居士作詩嘲之、清則清矣、儂禿翁過黎家借笠、婦人咲焉、邑犬吠焉、好事者鳴於繪事、以傳之、達則達矣、而止於一榮一辱、百是百非、々琳之所取也、

〔補庵京華續集・「代笠齋記」文・抄出〕

文明十四年八月、相国寺杏雲琳藏主の齋名「代笠」に對する記を製する。飯顛山頭逸話は蘇軾の過黎家借笠逸話とともに、笠に關する逸話として引用される。飯顛山頭逸話（詩）については、青蓮居士・李白作の「嘲詩」であること、「瘦と飯顛・卓牛の對照の妙」が存すること、さらには「清」・清事であるとする。逸話を清とすることに對しては、前述の蘇軾・「徐使君分新火」詩等の影響もあろうが、李杜の親交を認める横川の見解が示されているように考える。瘦の因については触れていない。「瘦工部」^{（あるいは）}「瘦」^{（拾遺）とも}と

は杜甫のことを指し、一の愛称・渾名として用いられることがあるが、愛称・渾名として成立するにあたっては飯顛山頭逸話も重要な役割を果たしたものであろう。横川・補庵京華前集・「雨中聞隣人吹笛」詩には「関山頭白瘦工部、一笛三年只月明」句がある（このは舟舂桂・幻雲詩藁・「落帽梅」詩の転句、風流若似瘦工部^{（か）}、月周麟・翰林胡蘆集・「前住建長淳英和尚慈像」四六文の「瘦拾遺騎

驥、筆下蚤炊白玉句等。横川の二は、次の字説である。
余久廢筆硯、辭之不允、諡曰、夫子配陳蔡之間、夷齊餓首陽之下、

李廣苦於用心、少陵苦於作詩、所謂苦之使然者歟、

（補庵京華前集・「苦樂齋説」・抄出）

文明四年六月、雲州刺史・神保長通（山家信、法諱宗通、別）の
ために齋名・「苦樂」の字説を製している。「苦」に關する逸話・
故事として、杜甫は孔子・伯夷・叔齊・李広例とともに詠出されて
いる。『苦於作詩』とは、飯頼山頭逸話の「作詩苦」を踏まえての
表現である。横川の三は、次の詩である。

飯頼山頭 利涉和
尚在座

雲蒸飯頼破天擘 人飽浮嵐軟翠邊 憶在京華炊白玉 無心椀裏不
盛山 （小補東遊續集）

利涉守漆在座の下、飯頼山頭に對した贊詩である。戯れの内容とも
解されるが（詩意。飯頼山は群雲を突いて天に聳え、看る人は漂
いて白米を炊いた時、何の気もなく椀の裏、杜甫飯頼山頭逸話の
に山盛りになつたことが悔やまれた）、杜甫飯頼山頭逸話の
面影・影響は薄い。逸話の影響は稀薄であるが、注目すべきは右詩
が山上水源寺での詠作であることである。横川は、応仁以来の戦乱
を近江国水源寺に避けた。水源寺背後の山を、飯高山・飯頼山と呼
ぶ。詩題（画図）「飯頼山図」は、これに因んで選ばれたものではあ
る。「飯頼」語は、水源寺の機縁の語として用いられることがある
（永源寺を詠出する作品には、飯頼山頭逸話とは）
（閑縁なく、「飯頼」語が用いられることがある）
横川の「飯頼山圖」詩は文明二年の詠作であるが、同時同所にお

ける作品と考えられるのが、次の小倉実澄の詩である。

飯頼山圖

王食艱難臥以來 民膏粒々有餘哀 飯山令（今）日笑吾否 口不
言詩瘦似梅 （小倉將監實澄詩草）

実澄は、近江蒲生郡佐久良の豪族で、横川と親交を結び、詩文の指
導を受けている。皇室の御食事も大乱以降は艱難を窮めているとい
うことで、それを聞くと民・百姓として脂汗を流して粒々辛苦して
米を作りながらも強い悲しみに襲われることである。眼前の飯頼山
は今日の我れを見てさぞや嘲笑することであろう、口に詩を吟する
こともならずただ瘦せ細っている有様であるから、とする。詩題・
画図に因み、承句で『粒々』語を用いるほか、実澄の場合は転・結
句で飯頼山頭逸話を詠出する（「小倉將監實澄詩草」は、横川の批
詩では、承句と結句に）。昔日杜甫は「作詩苦」による風流の瘦で
その跡が認められる。昨日杜甫は「作詩苦」による風流の瘦で
嘲笑されたものであるが、眼前自己はただ瘦せ姿を呈するのみであ
るとして謙遜する。

天隱竜沢（一〇五）は、「和小倉將監居士句并序」文に『明年春
暖、江郷雪消、頭戴破笠、尋居士於飯頼山前、則莫以生面待焉』
（黙雲）とし、「桂林老人、重和三篇、以見寄、且（且）告江左之
行、」詩に『遙思飯頼山前寺、四遠常聞檀信尋』（黙雲）とする。

前者は、文明五年度の作品で、小倉実澄が昇洛中の横川に再び永源
寺辺の識庵庵に還らんことを要請した招人詩軸に収められた（五山
新集・別卷一・詩）。後者は、大寂古仏・寂室元光の一百年忌のた
軸集成にも所収

めに永源寺への行を告げた桂林徳昌(寂室一燈仲一)に与えた答詩三篇の内の一である(詩後の註に「右想像改」)。兩作品とも、永源寺―飯顛山の連想である。

万里集九(一五〇)に、次のような序・詩が存する。

軍持挿花圖

軍持挿花、不識何人之資始、蓋舜舉以來、所畫、往々有焉、又陸渭南詩云、瓶花力盡無風落、對瓶裡之花而知閑之至味者、頗備斯一句、今斯筒中所挿之五種、其四各所知名之者、而其一无知之、其眞瘦於子美之瘦、憶商嶺之薇蕨、甚老却者乎、呼杜拾遺爲杜十姨、雖一旦之戲弄、詳見黃東發之日抄、謹題二十八言、掛瓶花云、

筒如瓶子挿群妍 松竹梅花并水仙 中雜無名一莖瘦 十夷笠莫飲

山前

(梅花無尺蕨)

軍持(水瓶のこと)とその中に挿された松・竹・梅・水仙・無名の一莖

(商嶺の薇蕨の老却したものとす)を描いた図への賛である。無名の一莖の形容

に杜甫の瘦を用いるが、詩の結句より飯顛山頭逸話に拠っていることが判る。頭に笠を戴いた十夷・杜甫の瘦姿は飯顛山前と言わず、

今限前の軍持の中にあるとする。万里は、作詩苦・李杜の親交等の

ことには触れない。杜十夷(姨)については、杭州の杜拾遺の廟に村儒が杜十夷と訛って題した故事による(万里が杜甫のことを「杜

十夷(姨)として詠出している例としては、「春」八「春澤軒書院寶危齋壁畫七首」の中の一詩の「獨付西枝杜十姨」や「早聯芳總危和尙」序文の

「杜十夷、八百年前、爲今日」預設此數聯乎哉等がある。万里には、次の作品もある。

尼之飯顛山下大本禪院、則大安之附庸、而風浪渺茫、雖隔大川、一葦可杭(杭)而已、戊戌冬末、大化老人自携鉢鉢養而視、謹袖一篇、以表江湖飄笠之賀云、

氣宇天然一段水 住持今日唱宗乘 飯山已遇詩中佛 大本豈非惠

足僧 受用松聲盛午鉢 安排茶味炸烏藤 江湖白髮十年友 薄暮

床頭來曲肱 余(遊) 大本半日

文明十年冬、美濃國鶴沼にある濟北山大安寺(大応派の峰翁祖一派)

の附庸である尼張国の飯顛山大本寺に住した大化老人に賀意を表すべく贈られた作品である。江湖疏に代えたものか。詩の前半部、とくに第三・四句において、飯顛山・大本寺を詠み込み、寺が人材を得たことを述べる。山名が飯顛であるところから、大化老人を杜甫に比している。杜甫に比して老人を賛することが目的であるから、逸話詩が嘲詩であることは勿論のこと、瘦・瘦の因・李白との親交等については触れていない。詩中「は、杜甫のことを指す

竹以來、能聞其香者、子美一人而已、故云、子美詩中佛」と説く

景徐周麟(一八)には、次の上堂法語がある。

臘八上堂、垂語云、飯顛山頭逢杜甫、爲問何因太瘦生、瞿曇々々

不許夜行、投明須到、

(翰林葫蘆集・萬年山相國承天禪寺五住法語)

文龜三年の作で、飯顛山頭逸話詩句を引用して説法する。

以上、本朝禪僧作品に詠出された飯顛山頭逸話(詩)について概観した。用例は多くない。目的が、機縁語としての「飯顛(山)」

語使用や逸話(詩)の存在指摘に止まるものもある。主体は、逸話

（詩）が「嘲詩」であること、瘦の因が「作詩苦」であること、「瘦と飯顛（・卓午）の対照の妙」が認められること等を理解・表現した作品である。

抄物・本朝禅僧作品の検討を終えるにあたり、筆者は次のような感想を抱く。本朝禅僧は中華の逸話に対し、厳密な分析・解釈の上に立って、理解している。飯顛山頭逸話（詩）の場合、本事詩の孟繁の評が「蓋譏其拘束也」であったのに対し、本朝禅僧は「拘束」の意味・原因を詩の内容に求め、さらには詩句の表現上の効果にまで説き及ぶ。この態度は、逸話解釈の手順の上からは不可欠である。禅僧の観念裡に整然と定着させるためには望ましいことである。ただし問題は、この観念裡に整頓された知識をそのままに自己の作品世界に提示することである。飯顛山頭逸話を詠出する禅僧作品の多くが、観念的・類型的に過ぎる傾向がありはしないか。禅僧が自己の問題意識を表述するにあたり、その手段として逸話を用いるのでなければ、真の創造ということにはならないであろう。この意味では、本朝禅僧の作品に対し、一抹の物足りなさを感じる。例えば、蘇軾は逸話原作者の意図を理解しながら、我が身の上の事に比して作品化している。逸話の瘦を流浪の瘦・生活苦の瘦に転じて詠出するが、決して逸話を誤解し杜甫を辱しめている訳ではない。

観点を交えて言えば、本朝禅僧には杜甫や蘇軾が持ち合わせたような生活体験・文学体験を欠いたために、知識の上での理解に終始したということかもしれない。自己の問題意識と結びつけて語られるには、杜甫の存在はあまりにも大きく、偶像化され過ぎていたと

言えるかもしれない。

飯顛山頭逸話詩の作者は李白とされる。が、禅僧の逸話・詩の理解・普及・作品化の過程において、李白に触れられることは少ない。本稿の副題を「禅林における杜甫像寸見」とした所以である。

【参考】近世期に入ってからの、飯顛山頭逸話の流布・影響については定かでない。参考として、次の二例を掲げる。

1. 芭蕉例

松尾芭蕉には、俳文「四山瓢」が存し、後半部に次のように記す。やがてもちゐて、隠士素翁にこふて、これが名を得さしむ。そのことは右にしろす。其句みなやまをもておくらるゝがゆへに四山とよぶ。中にも飯顛山は老杜のすめる地にして、李白がたはぶれの句あり。素翁りはくにかはりて我貧をきよくせむとす。かつむなしきときは、ちりの器となれ。得る時は一壺も千金をいだしきて、黛山もかろしとせむことしかり。（芭蕉文集・「四山瓢」）

芭蕉は、「いみじき糶」・米を入れるべき瓢の銘を山口素堂に依頼する。素堂は「一瓢重黛山、自笑稱箕山、莫慣首陽餓、這中飯顛山」なる「瓢之銘」を製す。芭蕉の「中にも飯顛山は」は、素堂の銘の結句に対する解である。飯顛山頭逸話詩を、戯詩・清詩として解している。なお、この時の芭蕉の発句は、「ものひとつ瓢はかるき我よかな」である。

2. 良寛（有願）例

良寛作とも、有願（良寛の）作とも言われる「題九相図」帖には、

次の作品が収められる。

讀杜子美詩贊憫體

飯顆山色滿 少陵瘦不愁 詩林稱獨步 數遭笑憫體

(「題九相図」帖)

杜甫の立場で、瘦に頓着しない様を「不愁」として詠出したのが新味である (同じく良寛作とも、有願作とも言われる『豆本』には、「杜甫騎馬の図に題す」として「匹身匹馬、飯顆に詩に苦しむ、瘦来りて骨有り、花落ち月は移る」が収められる。という。飯田利行著・「良寛憫體詩集譯」・一三二頁参照)。

(岡山大学教養部助教授)